# 東京（杉並）大空襲の戦災・被災の体験

●松ノ木二丁目
今成　昌和
（昭和八年生まれ）

府立十中一年のとき、現在住んでいる松ノ木の家での戦災・被災のことである。

昭和二〇年五月二六日未明、B29爆撃機の編隊がかなりの低空で、東京立正高校と堀之内小学校を中心とした松ノ木、堀の内の地域を北から南へ縦断した形で油脂焼夷弾を投下していった。B29爆撃機から投下した時点では三八発の油脂焼夷弾を束ねた大型弾になっていて、空中で自動的に分解して、一つ一つの焼夷弾が花火のようにきらきら光り、風に流れて落ちるようにして空から落ちてきた。家の庭の隅に父母とともに、私は自ら掘った防空壕の中で鉄カブトを被って戦闘準備をして待機していた。すると、暗闇の中で家の真中の部屋の六帖の間がパッと昼間のように明るくなった。油脂焼夷弾が落下して油脂が飛び散って燃え出したのである。「それっ」と掛け声とともに父と一緒に防火バケツで防火用水から水を汲み、日ごろ訓練で鍛えた要領で消火にあたった。すばやく飛び出したので直ぐに消火が出来た。その瞬間、隣の八帖の間にも焼夷弾が落下した。その消火に取り掛かっているうちに二階の八帖の間にも落下した。二階まで階段を上がって消火に行った。まだ間に合ったと思ったので、必死に消火に努めた。またもや、次から次へと油脂焼夷弾が落下して来た。父も私も、もう手に負えないと思うや、家はめらめらと燃えだした。父が自分の家はもうだめだということで隣の家への類焼を防ごうということで、隣の家の類焼を防ぎにかかった。朝まで必死の消火で隣の類焼を防いだが、朝になりふと気がつくと私の家は焼け落ち、着のみ着のままの姿であった。庭には一メートル四方の中に油脂焼夷弾が四発も落下し、集中的に落下されていた状態であった。よく私の身体に直撃を受けずにすんだものだ、また死ななくてすんだものだと思った。もちろん、学校には行けないし、食べるものは防空壕の中にある戦時用の乾パンぐらいである。それを妹たちと五人で食べなければならないとふと思った。

トントントンからりと隣組の人たちも、焼けだされた家の人と焼けなかった家の人に分かれたが、心の中には戦闘精神が残っていたので、家が焼けて悲しいというふうには思わな

かった。焼けなかった家の人からニギリ飯をもらったりしてその日は食事をした。しかし、皆食糧が不足をしている状態であるから、次の日はそのようなことは考えられない。要するに防空壕の中の乾パンを細々と食べていかなければならない。その日より家の焼け跡をシャベルやクワなどで、瓦、トタンなどを片付けて、焼け跡整理にかかった。体は汗と焼けぼっくいや焼け壁砂でよごれるが、庭の井戸の水だけがたよりで、石鹸があるわけでないから、体を拭いた後でも他人が見たら悲惨な姿であったろう。

二、三日もたつと、堀之内小学校の友や知人が油脂焼夷弾に直撃されて死んだとか、油脂焼夷弾でやけどをして重傷だとか、話が伝わって来た。自然のうちに手でその悲しみに対して合掌した。地域の周囲はB29爆撃機が通った跡のように、堀之内小学校を中心にして斜めに焼野原になっていた。焼け跡地を整理をしている時でもB29の編隊が京浜工業地帯に飛んでいく姿を空に見ると、家の向かいの済美山にある高射砲陣地と東京立正高校の講堂の屋上にある高射機関砲からB29の編隊に対して照準をあわせて撃っていた。撃つたびに地響きがした。戦闘機がB29の編隊に対して下からもぐり、一撃をあたえB29が白い煙をはいて編隊から遅れていくような場面も二、三回見ている。その機銃の流れ弾が空から落ちてきて家の木に食いこんだ体験もある。

家の焼けた跡にシャベルなどで整理した後、庭の片隅に焼けトタンのバラックの小さいのを作ってそこに住んだ。そのバラックは、屋根も廻りも焼けぼっくいの木で組んだ柱にトタンを打ち付けたものであるから、雨を凌ぐ程度のものである。寝ている時は焼けとたんの屋根の透き間から星や月が見える状態であった。

食事ときたら、カボチャの太い茎や大根をおかゆに入れて、おかゆの中に米粒が浮かんでいるようなものを食べた。サツマイモの茎を食べたり、サツマ芋やじゃが芋は主食で、サツマ芋を乾燥して粉にして「だんご」らしいものを作って食べたりもした。家の焼け跡や庭は畑を作り、野菜や芋を作って一部自給自足をした。このようななかで、中学に行くのだが、朝早くから五日市街道を歩いて六キロぐらいの道を通学した。まだ何か食べられる人は幸せであった。

まさに家が焼け、友や近所の人が傷ついたり死んだり、空ではB29の編隊と戦闘機との空の戦い、済美山からの高射砲の攻撃と、昭和二〇年の八月一五日まで連日の戦いであった。精神力が遂に八月一五日の終戦によって糸が切れた。

それから平和がやって来た。二度とこのような悲惨なことを起こさないように戦争は行ってはならない。国際的協調と対話と共存共栄が必要であることを認識し、平和を維持するためのあらゆる努力が必要であることを、痛切に心にかみしめている。

# 国民学校五年生の日記を通して

●上井草三丁目
大西　路男
（昭和六年生まれ）

杉並区上高井戸に生まれ、育ち、戦前、戦中、戦後を通じてずっとそこにいた私は、兵隊にこそならなかったが、〝戦争〟というものをいやという程体験した。

とりわけ、昭和二〇年五月二五日夜の、東京西部大空襲のことは悪夢のように鮮明によみがえってくる。まっ暗な夜空から、ヒュルルル……と無気味な音をたてながら落ちてくる爆弾や焼夷弾。一晩中鳴りやまない消防自動車のサイレン。高射砲の地響き（近くに陣地があった）。次第にまっ赤に染まっていく空。サーチライトに浮ぶB29の編隊。収穫直前の麦畑に火がつく。スコップを持って走る。ヒュルルルル……伏せろ！防空壕へ入れ！西の畑が燃えている。行け！――。どこがどうやられたのか分からないまま、一睡もしない一夜が明けた。翌朝、近くの友人の家やその付近がすっかり焼けてしまったのを見て愕然とした。そのころ私の家は、まだワラ屋根だったので、一つでも焼夷弾が落ちればあっという間に全焼してしまっただろう。

×　×　×

今、手元に、昭和一七年、東京市高井戸国民学校五年生の日記が残っているので、それを紹介してみる。

四月一日（水）

今日は一日なのでお宮へ参ってきた。ご飯を食べてから式に行った。僕たちの先生はH先生で、教室は二階だ。

四月三日（金）

今日は神武天皇祭で学校は休みだ。

四月八日（水）

今日は第四回大詔奉載日だ。千葉からいただいた卵は今日でおしまいだ。最後の一つをお母さんがお弁当に入れてくれた。

四月一一日（土）

学校からとんで帰って、すぐ、網とバケツを持って水車の方へ行った。たなごやはや、あかんべな、えび、貝などいろいろな種類のものをとってきた。魚だけで二〇匹位とった。

四月一七日（金）

日本へ敵が初空襲。僕たちが日なたぼっこをしていると、

相当低空を飛ぶらしい飛行機のプロペラの音がしてきた。見ようとしたが、木があって見えなかった。あとで聞くと、敵アメリカの中型爆撃機だったそうだ。僕は見ればよかったなあと、あとでつくづく思った。生まれて初めての敵機を見逃してしまったのだ

四月二四日（金）

配給のお菓子がきた。一つ七銭だ。一人一つだけ。一つではあまりあっけない。

四月二七日（月）

第三七回海軍記念日だ。一時間目が終わってから講堂へ入って、海軍大佐のお話を聞いた。

四月二八日（火）

お父さんが、「軍艦の科学絵話」という本を買ってきて下さった。学校に兵隊さんが三〇〇名きた。

四月二九日（水）

今日は天長節だ。式のあと赤白の餅をいただいてきた。めずらしくてとてもおいしかった。

五月一五日（金）遠足の日

天気は日本晴。学校へ行ったらすぐりん（リン）が鳴ってしまった。小田急に乗って、江の島の一つ前の駅までくるともうそこは砂地だ。かまくら宮で第一回の弁当をたべた。僕は……お金を持っていかなくて、みやげ物を買うことが出来なかった……そればかり気にしていた。江の島、かまくらで二回しゃしんをうつした。江の島はとてもおもしろかった。

五月二一日（木）

今日は、青少年に勅語を賜りたる日なので、式をしてから、きょうほ大会をひらいた。高井戸の四つの学校の少年団員が大宮公園に集まって井の頭まで歩いて行った。べんとうをたべて、また歩いてかえってきた。三、四年生は電車でかえった。卵が六つ配給になった。

五月二九日（金）

今日は全部でお金を六〇銭もっていった。ボールが二〇銭、その上には「戦しょう第一次祝賀記念」としるしてあった。写真は一枚二〇銭で、僕はかまくらのと江の島の二枚とも買った。

六月五日（金）

七時のニュースの時間にものすごい発表があった。それは、我が特しゅせんこうていが五月三一日に、マダガスカル島の西、東アフリカをこうげきし、三一日の夜、オーストラリアのシドニーへもこうげきをして船をしずめたという事であった。第二回目の特しゅせんこうていだ。また、明日の新聞がものすごいだろう。

六月一五日（月）

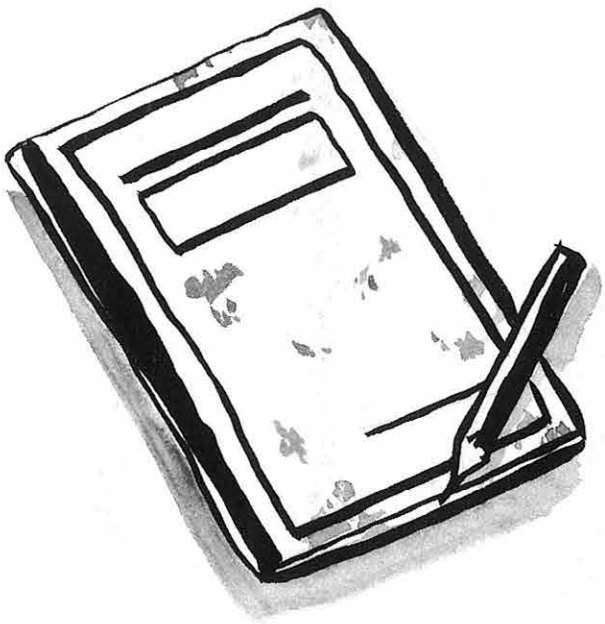
今日は月曜日なので、本当は「じゅぎょう」があるのだが市会議員の選挙で講堂を使っているので無い。T先生が亡くなった。おとといは学校に来たのだが昨日の夕方「しんぞうまひ」という急病で亡くなったそうだ。四月にこの学校に来て七四日目だ。

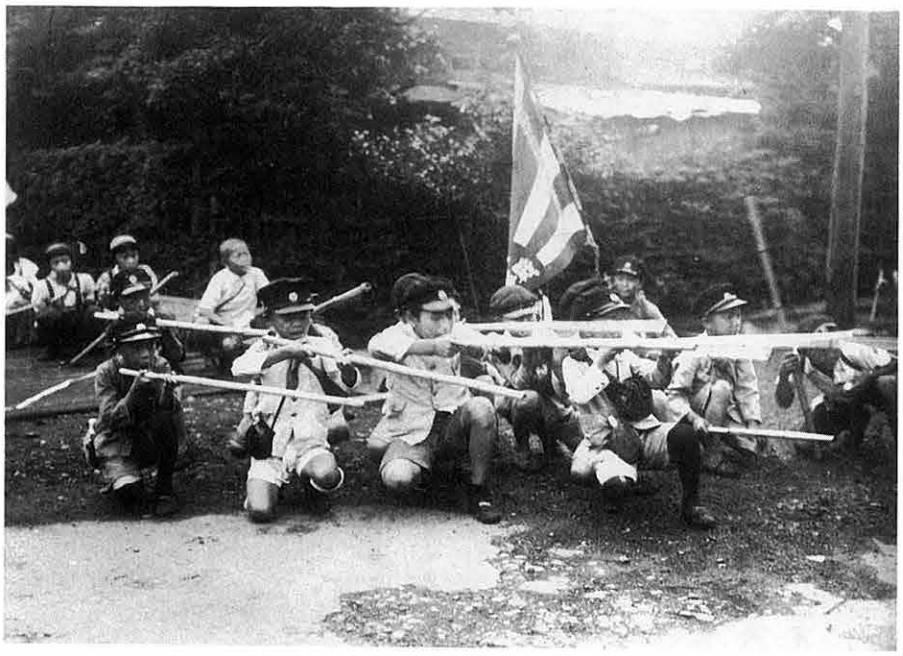
六月一九日（金）

今度の工作は木工で、ふで立てを作る。前の五年生はもっとやさしいものを作ったが、国民学校になってからは一年くらい上のむずかしいものをやる。くぎを一人当たり二二本ももらった。

× × ×

昭和一七年は、まだ「勝った、勝った」の戦争だった。一八、一九、二〇年と戦いは次第に悪化し、戦争が終わっても食糧難、生活難は続いた。着るものも履くものも無く、雨が降っても傘も無い。イナゴやアメリカザリガニを採って食べ、乳をとるために飼っていた山羊を殺して肉を食べた。また、荒地を開墾してサツマイモやカボチャを作り、何とか生きのびてきた。当時の生活を思うと、今生きているのが不思議なくらいの生活だった。





杉五小模擬戦（昭和19年ごろ）　〈区立郷土博物館所蔵〉

# 永福町・和泉一帯の空襲

●和泉三丁目
小川　春夫
（昭和一五年生まれ）

我が愛する街（永福町・和泉町）一帯も、空襲による大被害を受けた。同空襲は、昭和二〇年五月二五日（金）晴・夜一〇時半ごろに、空襲警報が鳴るとすぐ井ノ頭線車庫を軍需工場と誤認して、焼夷弾を雨のごとく落下する大空襲があった。同車庫を軍需工場と誤認しB29が空襲したというのは、当時の大人の話であった。

永福町の農家は三八軒中で二軒を残し、三六軒が焼失したという。最初井ノ頭線車庫附近を中心にして左右に焼夷弾の被害（火災）はどんどんと広まっていったという。なお、同車庫より出ていた列車（一両編成）が、不幸中の幸いで三両だけ助かったという。

我が家（旧和泉町八七六番地）の近所の人は、大宮町の高射砲の落下破片で、一名の方が大ケガをした。後になって判明した同空襲・怪我人の被害を聞くと、焼夷弾・高射砲の落下破片・消防活動等で、頭や身体に一〇名位の軽重傷怪我人が出たという。

火災被害は、永福町・和泉町・下高井戸（一部）一帯で、一〇〇〇軒～一一〇軒の住宅・店舗等が大空襲の被害にあったという。

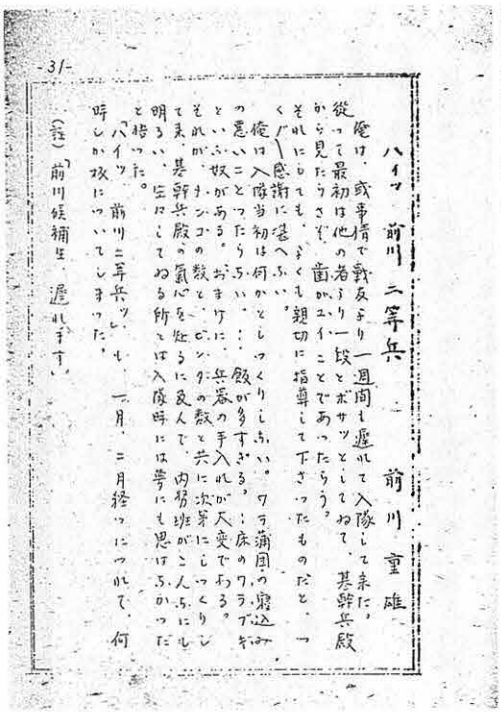
この空襲の時、我が家の所（防空壕の前）より、永福町駅方面を見ると、夜一一時近いというのに空を真っ赤にして、火の海で自分の家の方に向かってどんどんと家が焼けて来るのが判かり大変こわかった。

この空襲のB29に向かって、我が方の戦闘機（零戦か）たった一機が、体当たりに行き、チョウが舞うように落ちてくるが、現在になっても当時も私の印象に一番残っており、永久（とわ）に忘れる事が出来ない。

空襲による火災は、永福町駅の方より、商店街の左側は、高野表具店の所まで、同右側は帝都石材店の手前まで焼けてしまった。

我が家は、父が杉並消防署に勤務しており、夜勤で母が祖母と小さな子供二人で留守番をしていた。我が屋根にも、空襲の火の塊が雨のごとく降って来たが、庭の多くの植木が幸いに火の力を弱めてはくれたが、屋根の数か所に火がついた

が、大人の男性に一名応援していただき、母が夢中でムシロに水を含ませて、ハシゴを使い屋根全体にかけ、火事をやっとのことで消火することが出来ました。母が逃げていれば我が家は確実に火災で焼けたと思います。母は不思議で偉大だと深く感謝しています。



-31-

ハイマ　前川　二等兵　　前川　重雄

俺は、或事情で戦友より一週間も遅れて入隊して来た、従って最初は他の者より一段とボサツとしてゐて、甚野兵殿から見たらさぞ、面がゆいことであったらう。

それにしても、よくも親切に指導して下さったものだと、つくづく感謝に堪へない。

俺は入隊当初は何かとしつくりしない。

の悪いことつたらない……飯が多すぎる……床のワラブギ

といふ奴がある。おまけに、兵卷の手入れが大変である。

それが、ナンコの数と、ヒンクの数と共に次第にしつくりして来て、甚野兵殿の眞心を知るに及んで、内務班がこんなにも明るい、生甲斐のある所とは入隊時には夢にも思はなかつた。

「バイマ」前川二等兵ッ。

呼しかゝ故についてしまつた。

一月、二月経つにつれて、何

(註)「前川候補生、遅れます」

〈提供　前川重雄さん〉

# 東京空襲と広島の原爆体験

●成田西一丁目
尾﨑　守夫
（大正一四年生まれ）

食料品も、生活必需品も、店先から全く姿を消したころの昭和二〇年三月九日、夜半からの米軍B29爆撃機三〇〇余機による無差別東京大空襲。二〇〇〇トンの焼夷弾の投下によって、下町一帯は火の海となり、杉並辺りでさえ、その猛火の反射で、新聞が読めた程であった。下町を中心に、非道にも、その周囲に焼夷弾を投下して、その中にいた住民たちを袋の鼠の如く、逃げ道を絶ち、約一〇万人の非戦闘員である都民を焼き殺した。

翌朝、動員先へ着くと、浅草寺病院（現存）に、約二〇〇〇人の火傷患者が収容されているので、救護に行けとのこと。吾妻橋の上は、リヤカーや大八車の残骸と鍋、釜が無数に散乱し、松屋の窓からは、未だ火焔が吹き出しており、仲店は余燼（よじん）で熱く、浅草寺は焼け落ち、木札に「ご本尊ご安泰」とあった。境内のあちこちには折り重なった、衣服は焼け、褐色のマネキンのように空を掴んだ焼死体の山々、米英の仕業に憤慨した。

毎日集積される焼死体を、夕方、兵隊がトラックに鳶口で無造作に投げ込んで走り去るが、翌朝見ると、折れた手や足が積み残されていた。

区内では、当時桃井にあった中島飛行機工場を目標に爆撃が度々あり、多くの犠牲者が出た。雪の降る日、雲の上での空中戦、彼我の爆音は聞こえても姿は見えず、爆撃後も時限爆弾の爆発が四、五日も続いて、炸裂の地響きで家が震え不気味であった。

その後も度重なる空襲で、都内は見渡す限りの焼け野原、高い建物に登ると、東京の起伏地形がはっきりと判かった。五月二五日夜には、永福町から浜田山にかけて、焼夷弾が雨霰と投下され、永福町は丸焼け、我が家は、門と塀が焼けた。

井の頭線は、当時の永福町車庫が車両諸共全焼、焼け残った一輌だけの往復運転で、超満員、乗り損なうと、また一時間以上待たねばならないという状態だった。

沖縄が占領された直後の、五月二九日、広島に入営した。初年兵教育は米軍の上陸作戦に備えて、専ら爆薬を背負って、米軍戦車に体当たりする特攻訓練と、軍事物資の疎開作業と、

バラック兵舎の取り壊し作業で、寒い梅雨の降りしきる中を、廃材を荷車に山と積んで、今の原爆ドームの前を通り、宇品方面に運ぶ作業は過酷であった。

軍事基地、広島は、米軍艦載機の襲来は度々あったものの、爆弾の一発も投下せずに、上空を素通りして呉軍港を攻撃し、原爆実験のために温存されていたのであった。

二月余、日毎ブン殴られて、猛暑の八月六日朝。雲一つ無い青空にB29が一万メートル位の高度からパラシュートを投下したのを、爆心地点から約七〇〇メートルの兵営で眺めていた。警戒警報も解除され、十数分も経ったころ、視野一杯の閃光が走った。机の下に潜り込もうとした途端、異臭の物凄い爆風で、体は宙に浮いて、兵舎諸共、吹き飛ばされた。原子雲か砂塵の影響かで暗闇となり、助けを求める声が聞こえるが、前後不覚である。

暫くして、夜明けのごとく視野が開け、潰れた兵舎から這い出して、我が目を疑った。目前に聳えていた広島城は影も形も無く、二階建ての兵舎は木屑の山と化していた。

戸外で被爆した者は、皮膚は真っ黒に炭化し、屋内で被爆した我々は吹き飛んだ硝子が体中に刺さって血達磨。その木屑の中から、助けてくれと、絶叫が聞こえるが、手の施しようも無い。潰れた兵舎の中からシーツを持ち出し、包帯を作り、傷の手当てをし、気絶した者を防空壕に運び込んだり、兵舎の下敷きになっている者を救助するにも、テコにする物も無く、自分も全身打撲か力も出ない。梁の下敷きになり両足を骨折した戦友をやっと引き出したころ、木屑の山は猛烈に燃え出し、週番士官が退去せよ、と命令するので、軍装一式と助け出した戦友を担いで、猛火の中から、声を限りに、助けてくれと絶叫する悲鳴の合唱を後に、集結地点に向かった。

街に出ると、市電は直角に脱線、半身焼けた馬が走り、小学校からは火傷した児童たちの行列。押し潰された建物で狭い道は無くなり、瓦屋根の小屋上を、重い戦友を担いで歩く。常盤橋の袂の消防署が猛火に包まれて橋は渡れず、川に沿って方向も判らずに、人の群れとともに、火に追われながら、公園のような森に入り着く。この木立ちならば、燃えないだろう、と、座り込んだが、続々と、被災者が座り込んで、火傷した子供たちが、兵隊さん、寒いよ、水をくれ、と言う。水筒も毛布もカッパも差し与えた。立ち木が燃え出したのか、煙に咽ぶ。飯盒につめた煙草を出して、この世ともお別れだ、最後に一服しよう、と、辺りの人たちに四、五箱配った。これで煙草も最後と、吸っている間に、対岸が猛烈に燃え出し、火が金色に輝き、火の粉と熱風で息も出来ない。戦友を担いで川に入ったが、竜巻が起きて水面が盛り上がり、洗濯機の中のごとく、流木も死体も人間も芋を洗うがごとく、自分のことで精一杯、気が付いた時には戦友は見当たらず、行方不明となった（今もって一生の不覚の極みで、良心の呵責に悩まされている）。

そこから約五キロメートル先の集結地点に向かったが、三

キロメートル位までは熱で藁葺屋根は燃えたと言う。皮膚の垂れ下がった幽霊のような人々が、黙々と歩き、また、息も絶え絶えの人たちが倒れ道を塞ぎ、地獄の様相。自分自身出血と空腹（朝飯も食わず）で、七転び八起きの状態で、辿り着いたのは夜半であった。その辺りでも、爆心方向の硝子は割れ、戸障子は吹き飛んでいた。応急病院となった小学校は被爆負傷者で満員で、近くのお寺に収容された。

翌日からは、喉は腫れ、出血、飯どころか水も飲めず、刺さった硝子片を自分で取り除く。体中痛くて歩けず、傷口には蛆虫（うじむし）が発生、傍の小学校の校庭は死体の山。死臭の中で、戦友たちは苦しみ唸り、大した外傷もない戦友が、訳の分からぬ譫言を喋り出すと、間もなく息を引き取る。夜間の蠟燭（ろうそく）の灯が揺らぐお寺の本堂は幽霊屋敷のごとく、次は我が番かと観念したものであった。

三日後の八月九日、長崎に原爆投下。戦争指導者たちは慌てて、ポツダム宣言を受諾し、八月一五日、日本は降伏し、一五年間続いた戦争は終わった。

昭和二九年、米国のビキニ環礁水爆実験によって、第五福龍丸の死の灰被災を契機に、原水爆禁止運動が杉並から始まった。

米ロ首脳会談による、戦略核兵器削減交渉は続けられているが、全人類の叡智を結集して、核兵器の削減ではなく、廃絶を望むのは、人類存続のための緊急課題である。戦争は真っ平ゴメン。まして、広島原爆に比べようも無い想像を絶する核兵器とその量、核戦争に勝者は無く、人類は滅亡し、地球は破滅する運命にある。

# 逃げないで。自分たちの町は自分たちで守ろう。火を消せ!!

●高円寺北三丁目
坂野　光子
（大正一四年生まれ）

この馬橋の地に生まれ育った私は、六七歳になりました。現在、戦争体験を持つ世代が少なくなりつつあります。明治、大正、昭和を生き、町内会で特に防火活動に命がけで取組んだ父も八七歳で一四年前に死亡、愛国婦人会、国防婦人会などで仲間の先頭に立って荷車をひき、国のためと郵便貯金の集金などの奉仕活動をした母も、九八歳で二年前に他界しました。

そこで父母とともに戦争を体験した中から、私の記憶をもとにまとめてみます。

昭和二〇年五月二五日。私は牛込戦時託児所（現在の区立保育園）に勤務していました。「今日は私の誕生日。空襲がありませんように」と願いながら帰宅しました。

夕食後、御多分に漏れず警戒警報発令、町会長だった父は早速町内の見回りに出かけました。当時の馬橋四丁目南町会は中央線の北と南に跨り、高円寺駅より陸軍通信学校、陸軍気象部（現電話局、馬橋小学校）に通じる中通り商店街の南側、東は高円寺七丁目、西は阿佐谷に接する住宅地でした。道を挟んで陸軍施設があり爆撃、機銃掃射の目標になりました。中通りは軍人の行交う道でした。

父が見回りに出、家族は身支度、翌朝のお米の入ったお釜などを池のところに出し、縁側で待機、そこに父が帰宅しました。敵機は今日も富士山を目標に駿河湾を北上、東京に入るようである。家族の目と耳が西の空に集中、探知機のように静かに動く。「爆音がする、編隊の音」敵機の姿は見えない。その内に我がもの顔で現れることを想像しながら空を凝視する。当時の私たちは、毎日のように飛来する敵機に対し、襲来を察知したり、予知したりすることが出来たのです。危険から身を守る動物的本能が働いたのです。

今、空襲警報発令中、B29の姿はない。しかし、爆音がする。中央線南側焼跡に爆弾投下が始まる。トタンにぶつかる凄まじい音。大分念入りに繰返し繰返し投下している。「虱潰しにする積りだな」前回は青梅街道と中央線の間を焼き、今回は中央線の北側を、五月の南風が吹いている。「この風を利用してその続きを焼く計画だな」と思った。

敵機はだんだん機首を朴（ほお）の木（魔除けだと言われ我が家では台風の直撃を弱めるために辰巳の方角に植えている）の方向に偏って来た。我が家の真上に迫って来たのです。「今度、真上に来るぞ、防空壕に入ろう」と凵型の半地下式の壕に家族八名が入り、父が扉を引いた途端、シャシャシャ――、稲妻？　堅い金属を引き裂くような鋭い凄まじい音、凄い地響「落ちた！」と同時に壕から飛び出す。

そこは地獄!!　大きな大きな庭一杯の水びたしのぐじゃぐじゃの大穴、池も釜も池の周りに置いた物も無い。足場も無い。あと三〇センチ東によっていたら、全員の体が無くなっていたのです。神仏の加護のおかげと感謝した。我が家に投下されたのは五〇キロ焼夷爆弾で、池に命中、水を潜り炸裂したので発火せず、ゴム状の液を居間、座敷の天井等に飛散させ、爆風で庭石を吹き飛ばし家を傾かせる等でしたが、出火しないのが何よりの幸せでした。

防空壕を飛び出し辺りを見る。既に長屋から火が噴出している。我が家の働き手は五〇歳初めの両親、娘三名、中一年の弟の六名。「出火」行動開始!!　まず、鉄製の押上げポンプの本体の出動、上の妹が肩に担ぎ飛び出すと一緒に、下の妹が水桶を運ぶ。私がホースを運び取付ける。飛び出してきた人たちが力を合せ、我が家の井戸からバケツリレーの給水、ホース筒先は父、男の人、私が担当、男も女もない。川からのバケツリレー、四方から人が集まり機能的な延焼防止をした。消火中焼夷弾の落下もあったが、鳶口で叩き落す等、その協力と気迫は凄く素晴らしかった。この消火活動は火事場特有の悪臭を残しながら、明け方まで続いた。妹は朝まで黙黙とポンプを漕ぎ続け、誰もが精一杯、限界の消火活動でした。

朝食「お釜が無い。どこにいったのだろう」「あそこ」、道を隔てた隣家の屋根の上に庭石と鎮座しているではありませんか、皆んなで大笑い。水は溢れているが、米粒は溢れていない。釜底が平らになっている。いかに爆風が強かったかが窺（うかが）えます。

私の隣組だけでも同時に四発の爆弾、町内に投下された爆弾、焼夷弾は多数でしたが、同時に発火したのにどこも二、三軒で火を食い止めたと言うことで、当時の東京都長官の視察があり七月に表彰状を戴きました。会長名でと言われましたが、父は町民の勇敢で機能的な消火活動と協力の賜として、町会名で表彰して戴きました。

火災をどうして最小限で食止められたのか。

○当時、町民の誰もが自分たちの町は自分たちで守ろうと、逃げずに消火活動に徹底した。

○当時の消火訓練が理論的で具体的で実践を通して常に行われ、町民が体で覚え、本番に役立った。例えば発火と放水、ホース筒先操作、延焼の仕方と食止め方など。

○人と人の交流があって連帯意識が強かった。

私が今でも誇りに思うことは、当時の馬橋四丁目南町会の町民の勇敢な消火活動によって延焼を食い止めたということ

と、そして周辺地域をも戦災から守ったことになるのです。

地震災害が話題になる昨今ですが、父は町民を火災から守りたいという信念で戦前・戦後の防火の体験を基に、早い時期に市民消火隊の編成もしました。初期消火、延焼防止、そして広範囲の焼けない地域をつくる。その輪を周辺地域に広げることを言い続けた父ですが、広島に原爆が出現した時、「大変な事になった。対策を考えなければ」と、しみじみ言った言葉を思い出します。

勝っても負けても戦争はすべきではない。「地球が亡びる」との信念を今後に生かして生きていきたい。

支那事変割引国庫債券　〈提供　清水錦子さん〉